二〇二四年度

日本近世文学会春季大会

・大会プログラム
・研究発表要旨
・シンポジウム要旨

期日　六月八日（土）・九日（日）・十日（月）
会場　専修大学神田キャンパス10号館（１４０年記念館）
〒101―0051 東京都千代田区神田神保町三―四―四

一、参加申込および参加費の支払いは、Peatix もしくは郵便局備え付けの振替用紙（口座番号〇〇一六〇―一―一〇二八一三　口座名「日本近世文学会」、支払いの内訳を必ず明記のこと）にて、**五月十七日（金）**までにおこなってください（Peatix からの申込は十三時締切）。
一、**大会経費**は、参加費**一、五〇〇円**、懇親会費**六千円**（大学院生・学部生**三千円**）です。
一、出張依頼状をご入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局（早稲田大学）へメールでお申し出ください。
一、大会経費を Peatix からお支払いの場合は、システム上で領収書の発行が可能です。振替用紙にてお支払いの方、学会印入りの領収書が必要な方は、会場受付にて発行いたします。可能な限り、事前に学会事務局（早稲田大学）へお申し出くださいますようお願いいたします。
一、昼食の用意はございませんので、各自でご持参ください。
一、ご参加の方には、受付で資料集（冊子）をお渡しします。不参加の方への郵送は今回はおこないません。
一、一日目（六月八日）の若手交流企画で研究成果物の配布を希望される方は、事前にお申し込みください。
一、三日目（六月十日）は神田古書店ツアーをおこないます。古書店ツアーは必ず事前の予約をお願いいたします。
一、今回は会場校での展示はおこないませんが、大会参加者は天理ギャラリーでの展覧会を無料でご覧いただけます。ご観覧希望の方は、詳細を確認の上、必ず事前にお申し込みください。
一、年会費の振込は大会参加費とは別途お願いいたします。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
一、お急ぎの御用は左記へご連絡ください。

日本近世文学会二〇二四年度春季大会実行組織代表
専修大学　丸井　貴史
メールアドレス　conf@kinseibungakukai.com

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、二〇二四年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二四年四月二十二日

日本近世文学会春季大会実行組織代表　丸井貴史
日本近世文学会事務局代表　池澤一郎

〔日本近世文学会事務局〕
早稲田大学文学学術院　池澤一郎研究室
〒162―8644　東京都新宿区戸山一―二四―一
電　話　〇三―五二八六―三七二一（呼出）
メールアドレス　info@kinseibungakukai.com

大会プログラム

【会　場】専修大学神田キャンパス10号館（140年記念館）

【行　事】
第一日　六月八日（土）
大会受付（一一・三〇）
委員会（一二・〇〇～一三・〇〇）
委員会会場　八階　10082教室

若手交流企画（一二・〇〇～一三・三〇）
若手交流企画会場　四階　10042教室
「卒論、何書いた？　研究、どうしてる？」

開場時間（一三・三〇）
座談会（一四・〇〇～一六・一五）
座談会・総会会場　三階　10031教室（黒門ホール）
「神保町と日本近世文学会――古書店街の見てきた本と人」協力＝神田古書店連盟

企画コーディネート　昭和女子大学　荻原大地

聞き手　一誠堂書店　酒井健彦
　　誠心堂書店　橋口侯之介
　　大屋書房　纐纈くり
　　神戸大学　有澤知世
司会　慶應義塾大学　津田眞弓

日本近世文学会賞授賞式・総会（一六・二五～一七・四五）
懇親会（一八・〇〇～二〇・〇〇）
懇親会会場　十六階　相馬永胤記念ホール

第二日　六月九日（日）

大会受付（九・三〇）

研究発表会（一〇・〇〇～一二・三〇）

研究発表会会場　三階　１００３１教室（黒門ホール）

１　災害を詠じる題画詩――小野湖山『鄭絵餘意』考　城北中学校・高等学校（非）　松葉友惟

２　渋江保の筆写せる『慊堂遺稿』について　早稲田大学　池澤一郎

３　近世前期における落書の展開と「宝永落書」成立まで　日本大学　倉員正江

４　おさん・茂兵衛の「実説」をめぐって――『武辺大秘録』『武辺秘録』の記述から――　追手門学院大学　有働裕

昼休み（一二・三〇～一三・三〇）

編集委員会会場　十階　１０１０３教室

研究発表会（一三・三〇～一六・〇〇）

５　落語「大丸屋騒動」の成立　明星大学　勝又基

６　近世和算書『塵劫記』の文芸的翻案のいろいろ――時太郎可候（北斎）作画『胸中算用嘘店卸』を中心に――　慶應義塾大学・特別短期留学生　ジョセフ・ビルズ

７　北尾政美は黄表紙『栄増眼鏡徳』の挿絵を描いたのか――化物の描写を中心に――　学習院大学（院）　吉田慎一朗

８　黄表紙から合巻へ、そして浮世絵に――『視薬霞報条』の場合――　同朋大学名誉教授　服部仁

閉会（一六・〇〇）

第三日　六月十日（月）

神田古書店ツアー（一〇・〇〇～一二・〇〇）

場所　神田古書店街

協力店　一誠堂書店・大屋書房・沙羅書房・誠心堂書店・日本書房

＊学会員限定、要事前申し込み。参加費無料。

＊詳細については、お申し込みいただいた方に後日ご連絡します。

天理ギャラリー展示観覧のご案内

大会参加者は天理ギャラリーでの左記の展示を無料でご覧いただけます。ご希望の方は必ず事前にお申し込みいただき、事前の郵送（五月下旬頃、学会事務局より郵送）、もしくは大会受付で招待券をお受け取りください。

Peatix の場合は大会参加用フォームからお申し込みいただけます。振替用紙の場合は通信欄に展示観覧希望の旨と招待券の受け取り方法（郵送または大会受付で受け取り）をご記入ください。

天理ギャラリー第一八一回展

芭蕉の根源――北村季吟生誕四百年によせて――

会期　二〇二四年五月十二日（日）～六月九日（日）　※会期中無休

時間　九時三〇分～一七時三〇分（入場は一七時まで）

会場　天理ギャラリー（東京都千代田区神田錦町一―九）

展覧会特設ページ　https://www.tcl.gr.jp/2024/03/15/post-6812/

座談会「神保町と日本近世文学会――古書店街の見てきた本と人」概要

今大会の会場である専修大学神田キャンパスは、神田古書店街と近接する地に位置している。本学会員の多くが古書店に多大な恩恵を受けてきたことや、我々の研究が古書店なくして進展し得ないことなどはいうまでもないが、その交流はどのようにして今日まで続き、そしてどのようにして今後に続いていくのだろうか。古書店街と学会のこれまでとこれからについて、あらためてじっくり考えてみたい。

たとえば、近世文学研究に携わる者はほぼ例外なく古典籍に強い関心を抱いているが、画像データベースの拡充をはじめ、古典籍をめぐる状況はこの数十年で大きく変化した。その変化の捉え方は、立場が違えば異なるものになるだろう。古書店と研究者それぞれの認識を共有することは、古典籍の未来のためにも重要なことと思われる。また、古典籍展観大入札会をはじめとするイベントや、古書店の仕事の裏側に興味を持っている会員も少なくないはずであるが、そうしたお話を伺うこともできるかもしれない。その他、話題は多岐にわたることが予想される。この座談会を通して、古書と古書店の魅力を会員各位に再発見していただければ幸いである。

なお、本企画においては質疑応答の時間を設ける。この機会を奇貨として、関心のあることを積極的にご質問いただきたい。

※座談会で取り上げる話題についてご希望のある方は、五月十七日（金）までに、こちらからご意見をお寄せください。

座談会「神保町と日本近世文学会――古書店街の見てきた本と人」質問フォーム

https://forms.gle/XYJZPi1nDuxLrjHQ8

若手交流企画「卒論、何書いた？　研究、何してる?」概要

新型コロナウイルス感染症流行後、本学会でもオンライン形式、ハイブリッド形式で大会を開催してきた。参加者の時間や場所の制約が少ないオンライン学会のメリットは大きいものの、対面開催の学会であれば自然と生じていた、会員間での研究成果の交換や研究情報のやりとりや近況報告といった交流が途絶えてしまっている。

そこで、本企画では、「卒業論文」をテーマにフリートークをおこなう場を設ける。まだ卒論の記憶が鮮明な若手会員や、これから執筆を控えている学部学生から卒論は遠い昔の出来事というベテラン会員まで、また卒論から一貫したテーマを追い続けている方から卒論では現在とまったく異なる問題を論じたという方まで、幅広くご参加いただき、話題を広げていければ幸いである。

また、会場では論文抜刷、研究報告書等の研究成果の頒布、交換等をおこなえるようにする。

※研究成果の配布を希望する方は、五月二十四日（金）までに、こちらからお申し出ください。

若手交流企画・研究成果配布申し込みフォーム

https://forms.gle/UeJFqLowHSMUeiRi9

研究発表要旨

災害を詠じる題画詩
――小野湖山『鄭絵餘意』考

城北中学校・高等学校（非）　松葉友惟

小野湖山の『鄭絵餘意』（明治三年刊）は、山本栞谷の描く「窮民図鑑」なるものを見て作られた、災害によって苦しむ民草の姿を描写する十二首の題画詩である。明治八年に本作は明治天皇に献上され、湖山は硯と京絹を賜った。湖山が自身の居を「賜硯楼」と名付けた所以である。本発表は、この『鄭絵餘意』の内容の特徴と出版意図について分析するものである。

はじめに、本作品が本来は題画詩であることを踏まえ、湖山の見た「窮民図鑑」を稿本とする山本栞谷《艱民図》（皇居三の丸尚蔵館蔵）の内容にも触れつつ、その特徴を分析する。なお、『鄭繪餘意』の内容が改めて詩巻の体裁で献上されるにあたり、《艱民図》の構成に合わせて新たに三首が追加されていたことが、昨年、田中純一郎氏の論「山本栞谷《艱民図》の成立と伝来に関する考察」（『三の丸尚蔵館年報・紀要』二九、宮内庁、二〇二三）によって明らかになった。この三首の内容についても言及する。

続いて、本作品において蒲生裟亭の評が果たしている役割と、そこから推察される出版意図を分析する。序文によれば、詩は幕府が統治していた時代に当時の悪政への憤りを込めて作られたものである。しかし、裟亭が十二首それぞれに附した評を読むと、明治に入って出版された当時の時事批評が紛れており、『鄭絵餘意』という詩集そのものは、必ずしも過去の幕政のみを批判した作品ではなくなっていることを示す。

渋江保の筆写せる『慊堂遺稿』について

早稲田大学　池澤一郎

渋江保は鷗外の史伝『渋江抽齋』の情報提供者にして主人公の実子である。明治期には、著述家・翻訳家・教育者として多彩な活躍をするも、零落の一途を辿る。発表者が、文京区立森鷗外記念館所蔵の鷗外宛渋江保書翰を解読した（『森鷗外宛書簡集』第五集）処、渋江が鷗外の依頼で幕末の鴻儒松崎慊堂の詩文集を筆録し、かつ『慊堂日暦』等の本文と校合して提供していたことを知った。写本の過半は、鷗外の識語・書き入れを付して、現在東京大学総合図書館鷗外文庫に蔵され、電子画像で閲覧が出来、合山林太郎氏等の解題も添えられている。

本発表では、渋江保の『慊堂遺稿』の筆写態度が、父抽齋の「先善本を多求て異同を比讐し、誤謬を校正し、その字句を定め」（『抽齋吟稿』）るという精神を継承するものであり、その態度

は鷗外が傾倒していた松崎慊堂・狩谷棭齋等の考証学者の系譜に連なるものであることを確認する。書誌学、校勘学こそが、すべての学藝が基礎とすべき分野であり、一篇の「著作」を凌駕する学識を要求されるものであることを、『慊堂遺稿』における渋江保の校勘のありかたと書き入れとに確認する。加之、近代文藝評論の白眉とされる『森鷗外』の著者石川淳が、慊堂・棭齋の考証学を敬慕する鷗外の精神を誠実に継承しようとしていたことをも、『前賢餘韻』の記事やこのほど公刊が開始された石川淳の日記等に拠って実証する。

近世前期における落書の展開と「宝永落書」成立まで

日本大学　倉員正江

明治期に矢島松軒が収集した落書（らくしょ）は鈴木棠三・岡田哲編『江戸時代落書類聚』（原本国立国会図書館蔵・翻刻東京堂出版一九八四）で紹介され、中でも五代将軍徳川綱吉（正保三年〈一六四六〉～宝永六年〈一七〇九〉）の治世下と没後に多出したいわゆる「宝永落書」は巻之二～四に該当し、最大の量を誇る。また鈴木棠三編『落首辞典』（東京堂出版一九八二）が、狂歌形式の作を補塡したが、それ以外の落書は未翻刻・未検討のものが多い。

筆者は以前「東叡山通夜物語」「日光邯鄲枕」など通夜物語形式の落書を資料として浮世草子時事小説との影響関係を論じた（『浮世草子時事小説集』解題〈国書刊行会一九九四〉）。その後も落書の探索に努め、国立公文書館内閣文庫蔵『墨海山筆』（天保十四年閏九月十三日関根為宝序 デジタルアーカイブ画像公開）第八冊所収「宝永落書」を抄出し、その知的戯作性を考察した（「宝永落書の再検討」『人間科学研究』21二〇二四・三）。また四代将軍家綱逝去時の「大森信濃守上野通夜物語」（朝日重村・重章編『塵点録』・西尾市岩瀬文庫蔵『落書ふみ』〈仮題〉所収）等、「宝永落書」に先行する類似の作品を見出した。

落書は甚大な自然災害や衝撃的な事件発生時のほかに、将軍の代替わりに流布する傾向がある。本発表では、未紹介作品を主な資料として近世前期における落書の表現形式「なおし」（古典のパロディ）と、政治の刷新を期待する「世直し願望」とでも言うべき性格を指摘する。

おさん・茂兵衛の「実説」をめぐって
――『武辺大秘録』『武辺秘録』の記述から――

追手門学院大学　有働　裕

西鶴の『好色五人女』巻三「中段にみる暦屋物語」や近松の『大経師昔暦』の題材となった事件について、諏訪春雄氏は「大経師昔暦の実説」（『近世文芸』二十二号）で、「京都所司代の法令類を輯め役人の参考にした書籍」に、天和三年九月二十二日に粟田口において、おさん、茂兵衛の二名が磔、下女たまが獄門の刑に処されたと記されていることを指摘している。

現在のところ、この事件に関するもっとも信憑性の高い資料とされているが、諏訪氏が参照したのは、雑誌『趣味』明治四十二年二月号掲載の春蘿生「おさん茂兵衛の事実に就いて附堀川浪之鼓の事実」の中の記述であった。以後その「書籍」の現物についての報告がなされていないため、近年では滅失の可能性が言及されたりもしている。

その春蘿生の記述とほぼ同様のものを、京都町奉行所の判例に関する資料である、国立国会図書館蔵『武辺大秘録』（『京都町触集成　別巻3』所収）と京都大学大学院文学研究科図書館蔵『武辺秘録』の中に見出すことができる。本発表では、このいずれかを春蘿生が参照したと考えられることを述べ、処刑の詳細についての記録部分は信憑性が高いと思われることや、付記されている供養塔等に関しては疑問が存することに言及する。

落語「大丸屋騒動」の成立

明星大学　勝又　基

落語「大丸屋騒動」は上方の大ネタとして親しまれている。大丸屋の当主宗兵衛の弟・宗三郎が、愛人である祇園の舞妓・おときに逢いたいばかりに村正の刀で脅そうとするが、誤って斬り殺してしまい、妖刀の導きで路上に出て多くの人に斬りつける、という筋である。安永四年（一七七五）に実際に起こった刃傷事件に基づいた落語である。

この事件の話芸化は、実録体小説→講談→落語という流れをたどった。これは事件に基づく話芸の成立過程としては典型的なものだと言って良い。ただこの事件にはいくつかの特色がある。第一は、公儀への書上写という事件記録が残ることだ（西沢一鳳『讃仏乗』掲載）。これとの比較において、その後の創作・脚色のさまを跡づけることができる。興味深いことに、記録では犯人の使用した刀は粟田口だと記されている。ここから村正伝説の求心力を見て取ることができる。

第二は、ＵＣバークレー校東アジア図書館蔵の伝・芥川丹邱著『凶刀伝』（写本一冊）という漢文作品が存在することだ。

事件後ほどなく執筆されたと思しい該書は、世に様々な巷説が広まっているために事実に近い所を記す、と謳ってはいるものの、実際には創作性が高い。これにも妖刀・村正が登場し、犯人が妾の浮気を疑って殺害するなどの脚色が見られる。

大丸屋騒動は事件直後から村正伝説と結びつけられた。このことが豊かな文学的展開を導いたと言えるだろう。

近世和算書『塵劫記』の文芸的翻案のいろいろ
――時太郎可候（北斎）作画『胸中算用嘘店卸』を中心に――

慶應義塾大学特別短期留学生　ジョセフ・ビルズ

周知の通り、吉田光吉が執筆した和算書『塵劫記』は寛永四年（一六二七）から現代に至るまで様々な形で再版かつ再生され、広く「鼠算」などの問題や挿絵の意匠が人々に共有された。先行研究が主に数学や書誌学の領域で行われ、鈴木久夫氏が「江戸文学と珠算（3）」（一九七三年）で和算に関わる作やパロディー作を目録化したものの、詳細な分析までに至っていない。

よって本発表では、鈴木氏の目録を修正しつつ、近世文芸が具体的にどのような方法で『塵劫記』を翻案したかについて考察したい。まず近世文芸で使われた翻案方法は主に次の三種である。題名だけをもじるもの、書型と内容をもじるもの（所謂「表現模倣形式」）、問題が物語に利用されるもの（仮に「算術物語」と名づける）。その算術物語で、草稿が残る時太郎可候（北斎）作画の黄表紙『胸中算用嘘店卸』（享和三年〈一八〇三〉刊）は特に注目すべき作である。「五三」と「加三」の「算勘国」での冒険で『塵劫記』の計算問題で目前の難問を解決するように、同書で使われる意匠や問題がそのまま活用され、読者が問題を理解しなければ読み進められないといったように、文学と計算の融合が行われている。草稿からの改変を読み解き草双紙史上の意味を考え、北斎の画力と筆力の高さと、面白みがないとされてきた寛政期以後黄表紙の価値を再評価し、かつ多様な分野の知が文芸と融合する作が一般に向け販売可能であったことを、江戸文芸の一つの特徴として示したい。

北尾政美は黄表紙『栄増眼鏡徳』の挿絵を描いたのか
――化物の描写を中心に――

学習院大学（院）　吉田慎一朗

『栄増眼鏡徳』（寛政二年〈一七九〇〉刊。以下、『栄増』と略す）は眼鏡を主題とする珍しい黄表紙である。棚橋正博氏『黄表紙総覧』（青裳堂書店、一九八六年）は本作の画工を北尾政

美とするが、本発表ではこれが政美画ではないことを論証しつつ、政美の黄表紙に見られる特徴を示すことを目的とする。

具体的には、三つの視点から検証を行う。一点目であるが、化物たちが登場する場面は、北尾政美が画工を務めた『天怪着到牒』（天明八年〈一七八八〉刊）の一丁裏・二丁表と化物の種類・描法や構図において類似点を持つ一方、技術不足が目立ち、『天怪着到牒』の醜悪な化物像を意識しつつ滑稽化して描いていることから、政美ではない何者かが、政美の描く化物へのオマージュを試みたと見ることができる。二点目に、『栄増』に描かれる眼鏡は、政美が他の黄表紙等に描いた眼鏡と大きさや形状、使用法に明確な違いがある。三点目に、『栄増』の浮絵風の挿絵は遠近画法に則っておらず、浮絵でも名を馳せた政美が描いたにしては稚拙な印象が否めない。その他、本作には、政美本人によるとも、模倣ともとれる特徴的な図柄が存在する。

『栄増』はマイナーな作品であるが、本発表において、本作を起点として多くの政美作品を検証し、黄表紙時代の政美の特徴を複数示すことで、今後、他の黄表紙について政美画であるか否かを判断するための一つの指標を提示したい。その点で、北尾政美研究に資するものであると考える。

黄表紙から合巻へ、そして浮世絵に
――『視薬霞報条』の場合――

同朋大学名誉教授　服部　仁

寛政十二年（一八〇〇）正月に曲亭馬琴作（北尾重政画）の黄表紙『視薬霞報条』（三巻三冊、鶴屋喜右衛門刊）が刊行された。その三十七年後の天保八年（一八三七）、合巻仕様にして『視薬霞報条』（三巻二冊、鶴屋喜右衛門刊）が再板された。この間の事情については、棚橋正博氏の『黄表紙總覧　中篇』（平成元年）に詳しい。当初の喜右衛門から二代あとの喜右衛門にあたるが、板権はずっと保持していたようで、再板することに問題は一切なかったようだ。ただし合巻仕様にするにあたって、重政は文政三年（一八二〇）に亡くなっていたので絵師を歌川国芳に変更し、新規に錦絵風摺付表紙を付け、本文中の絵もすべて書き直している。しかもところどころ役者似顔で描いている。例えば上巻の表紙絵は七代目市川團十郎（この頃は、七代目市川海老蔵と称している）、下巻の表紙絵は五代目岩井半四郎である。

ここまでのことは従来から知られていることであるが、再板から二十五年後、即ち幕末文久二年（一八六二）改印の浮世絵に「視薬霞の引札」という一連の戯画がある。馬琴は嘉永元年（一八四八）に、国芳は文久元年に亡くなってはいるものの、

文章はほぼ同じで「三世一九述」と偽り、絵は黄表紙に酷似しており「一英斎芳艶画」と偽作まがいである。大判に二図、つまり中判全十二図のものである。

黄表紙から合巻へ、そして浮世絵にという変遷を見てみる。

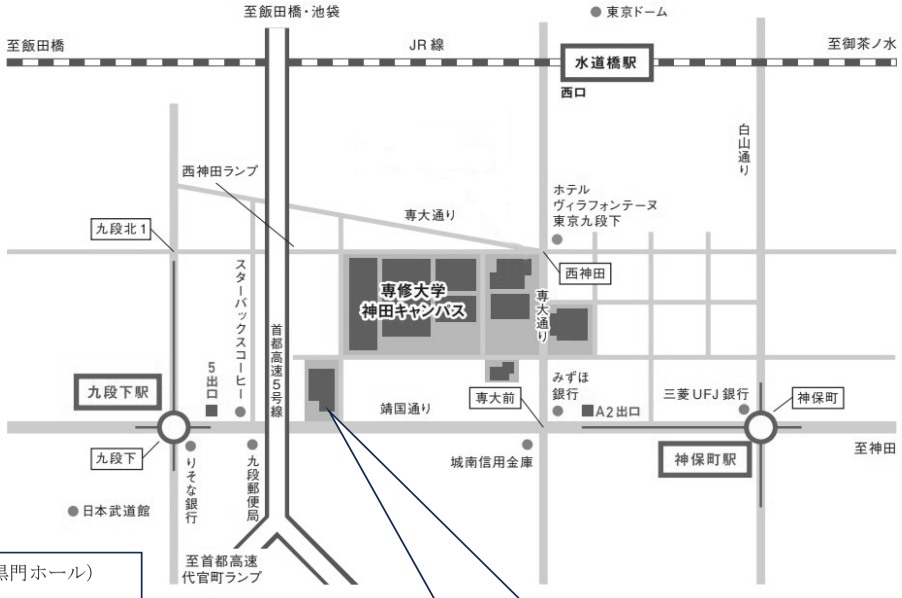
会場へのアクセス

神田キャンパス

■JR線
水道橋駅
西口より徒歩7分

■東京メトロ東西線、半蔵門線、都営地下鉄新宿線
九段下駅
「5」出口より 徒歩1分

■東京メトロ半蔵門線、都営地下鉄新宿線、三田線
神保町駅
「A2」出口より徒歩3分



研究発表会・座談会	3階	10031 教室（黒門ホール）
若手交流企画	4階	10042 教室
懇親会	16 階	相馬永胤記念ホール
委員会	8階	10082 教室
編集委員会	10 階	10103 教室
休憩室	6階	10061 教室
書籍販売	6階	10062 教室

専修大学神田キャンパス

１０号館（１４０年記念館）